

# なのはな

— 第2号 —

令和5年3月1日発行  
社会福祉法人青山福祉会  
特別養護老人ホームいがの里  
伊賀市愛田550番地

## ごあいさつ

施設長 阿部和弘

新たな年を迎えもう2か月となり、今年初めての広報誌の発行となります。遅ればせながら地域の皆様には、旧年中は大変お世話になりました。今年もどうぞよろしくお願いいたします。

まず初めに、昨年12月より新型コロナウイルス第8波を迎え、三重県や伊賀管内においては過去最高の感染者数となっています。昨年10月より新型コロナの水際対策が大幅に緩和され、人の移動も多くなったことから福祉施設でのクラスターの発生が増えました。全国では12月下旬の1週間で過去最多の954件発生しています。いがの里においては、11月に入居者2名、ショート利用者1名、職員5名が感染しました。ご家族や関係する皆様には大変ご心配をおかけしました。今では誰が感染してもおかしくない状況であり、5月8日には第5類に移行されるようです。そのため、今後感染者がもっと増えるのではないかと不安な状況ではありますが今後の動向に注視していきたいと思えます。

さて、私たち「いがの里」では、入居者の皆様が望まれる暮らしを送れるように、また、安心・安全で穏やかな暮らしが送れるように支援し、いがの里に入居して良かったとっていただけるように日々努めています。まだまだ、課題もありますが常にその思いを持って、職員と共にごんばっています。以前、瀬戸内寂聴さんの「魅入（みい）られたと思う瞬間の身の引き締まる感動こそ、生きている証のように思われます。その感動の数が多いほど、人は幸福な一生を送ったと言えるのではないか」という言葉を目にして、感銘を受けました。その方の思いに寄り添い喜んでもらったり感動していただけるように支援できればと思っています。

今回の「なのはな」第2号では、入居者様の生活の様子やいがの里での支援の取り組み、介護の魅力などをお伝えし、いがの里をより多くの方に身近に感じていただきたいと思っております。是非、またご意見をお聞かせください。最後に皆さまのご健勝とご多幸をお祈りして簡単ではありますがごあいさつとさせていただきます。

## 特殊浴槽が新しくなりました

いがの里が開設して以来使用していた特殊浴槽（寝たままのお風呂）が老朽化してきたことから、公益財団法人JKA様の福祉機器補助事業を受けて、特殊浴槽一式を導入しました。

新たな特殊浴槽となり、入居者の皆様には、安全で心地よく入浴して頂いております。また、職員も安全に入浴を支援することができ、身体的、精神的な負担の軽減となっており、大変感謝しております。

ありがとうございました



## 新米 バンザイー ～西柘植の光米～



昨年の12月21日（水）に西柘植小学校で「西柘植の光米」の贈呈式があり施設長が出席しました。今年も西柘植地域まちづくり協議会の方やJAいがふるさとの方にご協力頂き、5・6年生が一生懸命心をこめてお米を作ってくれました。いがの里の入居者様に召し上がってもらおうと購入させていただき、今年で3回目になります。1袋 5kg



のお米が15袋あり、入居者様に食べて頂き感想を聞くと、「とてもおいしかった」と喜ばれていました。このように地域の西柘植小学校の児童の皆さんや地域の皆さんとお米を通して繋がりを持つことができ、とてもうれしく思います。今はコロナ禍で施設には来てもらえませんが、感染状況が落ち着けば是非遊びにきてください。児童の皆さん、里田校長先生、関係者の皆様ありがとうございました。今後、ますます地域の皆様との繋がりを深めていければと思います。

お米と一緒に写っているのはお米を作ってくれた児童のお母さんで前川副主任です。

## 思いに寄り添って…



難病により嚥下機能が低下されている方が病院から「いがの里」に入居され、その後、食事が困難となり衰弱が著しく「看取り」となられました。

ご家族からは、ご本人は「口から食べれなくなったらそれで終わりや」と言っていた、と聞かせてもらっていたので、ご本人もすでに覚悟されていたのだと思います。まだお若いし、意思疎通も図れる。胃瘻の話もありましたが、「そこまでして生きたくない」と言われ、飲み込みやすい栄養補助食品や、ご家族様からの差し入れなど、ご本人の食べれる物を、食べれる時に、無理のない程度に食べて頂いていました。

そんなとき、奥様から、『死にたい、家に帰りたい、家だけでも見たい』と本人からメールが来た。最後の頼みかなと思う・・・と施設に連絡がありました。これが最後の望みなら・・・、明日になって間に合わなかったら・・・と皆が絶対悔いを残したくないという同じ想いで、職員間、またご家族様と連携をとり、急遽、車を手配し、看護師同行にて、自宅へ帰られました。コロナ禍の為、車外に出て頂くことは避け、車中から家の周辺や仏間など見られただけでしたが、生まれ育った我が家を見て、“もう思い残すことはない”と言わんばかりのとても安心されたような穏やかなご様子でした。

そして、その翌日、職員は目を疑いました。車いすに座り、眼鏡をかけて新聞を読んでいるご本人の姿があったのです。その後、機能訓練にも積極的に参加!食事も少しずつ食べられるようになり、医師も驚く回復。2カ月後には看取りが解除されました。

ご本人に、「先生が『看取りを解除する』と言ってくれたよ」と声を掛けた時には、涙ぐまれ、我々もとてもうれしかったです。ご家族様の愛情が、ご本人の生きる希望となり奇跡を呼んだのだと感じました。

「もしものとき」に備えて、自らが望む医療やケアについて前もって考え、家族や医療・ケアチーム等と繰り返し話し合い、共有する取組のことを「アドバンス・ケア・プランニング」(ACP)「人生会議」と言います。ACPをもとにいがの里の職員は穏やかな最期を迎えることができるよう、ご本人とご家族の気持ちに最期まで寄り添いたいと思います。

看護主任 大上 智恵

# 暮らしのひとコマ



これ全部  
食べて  
いいの~?!

振袖着せて  
もらい  
ました

## THE KIMONO

成人式のニュースを入居者様と一緒に見ていた外国籍の職員が「あんなきれいな振袖いいなあ、一度着てみたいわ。」と、ポツリと言った言葉を入居者様が耳にし、娘さんの晴れ着を着せてあげたいと提案してくださいました。当日は、管理栄養士の高橋と看護師の森川が着付け担当です。プロ顔負けの腕前でとっても綺麗に着付けてくれました。初めて着るお着物に緊張気味の職員でしたが、皆さんに着物姿を見て頂いて、笑顔がいっそう輝いていました。そして何よりも、晴れ着を貸して下さった入居者の方がとっても嬉しそうにされていたのが印象的でした。

ある男性入居者の奥様から「着物姿を見た主人がとっても喜んで電話で話してくれました。素晴らしい贈り物になりました。本人はもとより、家族までなんだか嬉しくて、幸せな気持ちになりました。ありがとうございました。」とお礼のお手紙を頂きました。30年以上思い出と共に大切にしまわれていたお着物。そして貸して下さった入居者様の気持ちが、皆に幸せを分けてくれたように思います。お着物も息を吹き返したようで、とってもきれいでした。ありがとうございました。



孫みたいで  
可愛い!  
帯の結び方も  
きれい!

## 新米 バンザイー ～西柘植の光米～



昨年の12月21日（水）に西柘植小学校で「西柘植の光米」の贈呈式があり施設長が出席しました。今年も西柘植地域まちづくり協議会の方やJAいがふるさとの方にご協力頂き、5・6年生が一生懸命心をこめてお米を作ってくれました。いがの里の入居者様に召し上がってもらおうと購入させていただき、今年で3回目になります。1袋 5kg



のお米が15袋あり、入居者様に食べて頂き感想を聞くと、「とてもおいしかった」と喜ばれていました。このように地域の西柘植小学校の児童の皆さんや地域の皆さんとお米を通して繋がりを持つことができ、とてもうれしく思います。今はコロナ禍で施設には来てもらえませんが、感染状況が落ち着けば是非遊びにきてください。児童の皆さん、里田校長先生、関係者の皆様ありがとうございました。今後、ますます地域の皆様との繋がりを深めていければと思います。

お米と一緒に写っているのはお米を作ってくれた児童のお母さんで前川副主任です。

## 思いに寄り添って…



難病により嚥下機能が低下されている方が病院から「いがの里」に入居され、その後、食事が困難となり衰弱が著しく「看取り」となられました。

ご家族からは、ご本人は「口から食べれなくなったらそれで終わりや」と言っていた、と聞かせてもらっていたので、ご本人もすでに覚悟されていたのだと思います。まだお若いし、意思疎通も図れる。胃瘻の話もありましたが、「そこまでして生きたくない」と言われ、飲み込みやすい栄養補助食品や、ご家族様からの差し入れなど、ご本人の食べれる物を、食べれる時に、無理のない程度に食べて頂いていました。

そんなとき、奥様から、『死にたい、家に帰りたい、家だけでも見たい』と本人からメールが来た。最後の頼みかなと思う・・・と施設に連絡がありました。これが最後の望みなら・・・、明日になって間に合わなかったら・・・と皆が絶対悔いを残したくないという同じ想いで、職員間、またご家族様と連携をとり、急遽、車を手配し、看護師同行にて、自宅へ帰られました。コロナ禍の為、車外に出て頂くことは避け、車中から家の周辺や仏間など見られただけでしたが、生まれ育った我が家を見て、“もう思い残すことはない”と言わんばかりのとても安心されたような穏やかなご様子でした。

そして、その翌日、職員は目を疑いました。車いすに座り、眼鏡をかけて新聞を読んでいるご本人の姿があったのです。その後、機能訓練にも積極的に参加!食事も少しずつ食べられるようになり、医師も驚く回復。2 カ月後には看取りが解除されました。

ご本人に、「先生が『看取りを解除する』と言ってくれたよ」と声を掛けた時には、涙ぐまれ、我々もとてもうれしかったです。ご家族様の愛情が、ご本人の生きる希望となり奇跡を呼んだのだと感じました。

「もしものとき」に備えて、自らが望む医療やケアについて前もって考え、家族や医療・ケアチーム等と繰り返し話し合い、共有する取組のことを「アドバンス・ケア・プランニング」(ACP)「人生会議」と言います。ACPをもとにいがの里の職員は穏やかな最期を迎えることができるよう、ご本人とご家族の気持ちに最期まで寄り添いたいと思います。

看護主任 大上 智恵